熊野軍記

附 山北一揆

291
70

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03996

中根文庫

上杉ハ甚苦記ス
秀吉ハ能ク攻セリ

甚空軍記

天子御宇阿之領地多く様々の領
熊野と山者御代々
会津御代世後、南朝と命に依る事に重なり立ち大変
之様加様を三山社家領地四社等不能世を領家
と云是利家云上一位に成り等 南朝に陸士に悪く領地数
没収 熊野熊野山 特別に法法として領家知行
孔雀 例被仕外行一方に不易に式参行事 無念山西作
萬々歳を祈る事 熊野軍家より毎年法代々請仕の
日方歳を祈る事 無年貢の神社也 織田信長公天下の様
を掌れて 熊野の山方 様を繁久 仕時 仕伊勢の道
る其等領家中江御頼侍の御書を下さる又真本
島 者番を以て及数通 御頼有領家等座者に尊

上日ハ壁一字
誤ナリ

291
20
1

古座高校図書館
8.1.21
蔵書No. 3996

中根七郎

熊野軍記

熊野と山者 常代ハ　　天子常宮殿と領地多く殊ハ領
会津綿丈後、南朝之命ニ随ふ者ハ悉ク大敗
之輩地紙ヲ三山社家知ル也四者莫不能世ヲ領家
と云是利家ニ五一位ニ給 南朝ニ陸士ハ悉く領地没
没収 熊野熊野ハ特別ハ法法として領家執行
孔書例被仕外行ヲ古不易式祭行事 無ヲ山ヲ祭
第ヲ歳ヲ祈る事無書の神社也 御田信長ハ天下の機
日ヲ方歳ヲ祈る事無書の神社也 御田信長ハ天下の機
を掌ヲ利て熊利のハ方ニ味ヲ照ヲ 仲時化仲則ハ道
る其節領家中江御頼侍の御書ヲ下さる又真木
長者蕃ヲ以て及数通御頼有領家等度ニ尊

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03996

民公ト御代々ニ思顧無之且又信長ニ代トナリ播
及勝本左ハ其他未拾入道快翁且幕の侍執ト云
所ヨリ無家ハ近年無故ニ被没収訴訟国三重郡北
条口一千餘貫ニ所ハ鳥羽院御宇所社家共五ヶ番会
ニ食料トナリ数百年を経るといへとも相違なきハ貴ハ
近年やもすれハ近邊ニ領主ヶ敷申懸ケるハ依て
数度ハ及ひ是を訴るといへとも沙汰ハ及ハ是を伊勢国
領島新宮領同国胡明郡本宮領北島ニ知行と一
度ハ被没収彼是思ひ合たれハ信長ハ伴部より義昭
ニ命令ヲ出るハ不及とも加勢ハ勢ハ方餘人ハ領家ハ外
国中ハ御士をかたらひ都合三萬餘ニ人数御味方ハ参
り騒動を自是徒領減亡ニ相越と有

大樹之時ニ就テハ中時ニ大樹ト称ハ

天正十三年秋之時ハ大樹ハ秀吉公辞官を集め無理事
先年迄利義昭ハ二条ニ三万餘の人数を使し口演ハ之
加り国中ハ御士とも御騒動を出ハ諸侯ハ富
家ハ代と有て日海中故事ハ人家ハ捉為敵人
きを大事ハ有く剥奪れハ同を様ニ往還を妨る事紙
を数度ハ義昭ハ評定有し堀田右馬之丞長盛ハ
りて国所停止ニ合を宮社務方ハ申遣る去比一夜法
印方ハ和田駿河守湯川岳部ハ輔之助書状ハ文ハ
先頃湯浅右近ハ日埜七郎次郎方迄夫使ニ書状令到
知候然共右仲間中ハ早速可罷登候ハ者ハ取持可
為静謐候此段ハ被申知候様ニと有候委細ハ申含
候ハ次急不能詳候右ニ趣ハ領家方ハ及相談候事

天正十三年秋之時ハ大樹ハ秀吉公辞官を集め無理事
先年迄利義昭ハ二条ニ三万餘の人数を使し口演ハ之
加り国中ハ御士とも御騒動を出ハ諸侯ハ富
家ハ代と有て日海中故事ハ人家ハ捉為敵人
きを大事ハ有く剥奪れハ同を様ニ往還を妨る事紙
を数度ハ義昭ハ評定有し堀田右馬之丞長盛ハ
りて国所停止ニ合を宮社務方ハ申遣る去比一夜法
印方ハ和田駿河守湯川岳部ハ輔之助書状ハ文ハ
先頃湯浅右近ハ日埜七郎次郎方迄夫使ニ書状令到
知候然共右仲間中ハ早速可罷登候ハ者ハ取持可
為静謐候此段ハ被申知候様ニと有候委細ハ申含
候ハ次急不能詳候右ニ趣ハ領家方ハ及相談候事

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03996

可然と云も有間敷事なれ共一決せざる勢
家の大故に評議の無之、近日大将幡
須賀伝右衛門、佐藤久右衛門、杉浦主水、都合
七千餘騎振出家を初め中郷士大半後援に由急を告
る湯川、和田、玉置、宮崎、白樫等各談合有りて無之
之計りて儀を成と云ども幡帰の等石を抱て流れ人の如し利
可有とも不實無之奪去る所なる諸大名多く下り四方擾
幡を持る世も不堪大内の如何ある中ん山(脱文ある故)
国一て大くはれを軍の門の晒と云ども是非を不辨時
分の一先敵を引受相談不叶時、無之の川熟り候に
第萬騎并者るとき一口計を大やはく落半ば内勢の勢
と可告表と一列を先麓の湊の古博物の柵をこつらえ敵

脱文の事
訓り難し若し在
逆かしてしか

口八月ニ非ヤ

を防ぐとて集まるくるの湯川安藝守、湯川善左衛、湯川
伝、和田一族、志賀、小中、三蘭尾、由良、古田、山下原、本
牛城の中に昔玉置右衛門尉を倒し奪を島山義数を殺せしれ
告げ不落後の赤神三郎左衛門尉計をく落城を
牛崎新を使とし心強く大木大石をつめ第万騎をそ
引受んと国元の気を奮ひ彼義の日吉より急を告る夜
前上方勢由良と宇表より村瀬の城切取られ遁急
成 在計戦具を堅固する間もなくて鉄砲を承迎を向もるく
味方数多計れ湯川も無之体にはなくの体おて奥の方昔
暮の出家を麓の湊く数之場を見れい狂歌有
今年七の子の目の前にはれ松原おくびやう会わ川れてぞ出く

牛車湯川直春間ニ倒合戸を「車門」ハ「くるま」とも云ふ
一軍せでハ叶ハず、そこ引通せんと云けるを鉞ハ、木山、吉
ハ、熊代、吉川、等相背ハ相留ハ大将松倉ハ浮者等
去の代ハ弟口口口口業ハ大保思召候せんや今
命を惜んしたも知ハ不覚の事ハ恐と一筆ハ留ハ直
春も惜らして涙流して止り去ハ去程ハ敵の口ハ城ハ指
人数ハ集る人々ハ口口号部型南部ニ山中右馬丞ニ刈
井尾張守秋津ハ愛洲三郎長俊ニ、柳ニ山本右馬守保
志真弥左ハ、同新左馬、近藤次郎盛次、
湯川ハ吉田人道、松本主水、郡嶋、同息松本源次郎、同
才松本源次郎、郡嶋泰九郎良郡、和田左馬良則
号左衛ハ井同弟山崎大郎 湯川大蔵助、切原ニ同弟六郎

ハ本ハ「宇宮美」
有ハ「うとし」絵ハ
「ハ」ニ赤ハ

ハ本ハ三宅村ハ「ハ」
本宮社家ハ

川ハ「文字不明」
場ハ
和田ハ「鶴ハ」ニ
字脱

良粗ハ不明

有馬ハ本ハ

行常、荒山常ハ大多門尉、蜂太郎、川瑞左馬尉、金
剛六郎、本宮ハ和田鶴、駿河守良秀、金剛和田五
郎良勢、和田治部ハ蜂良宗、後ハ鶴ハ左ハ息和田三郎左
衛門尉良粗、弟和田三河守良次、和田新右大道良鎮
和田左馬衛良信、弟主殿頭良宗、同息右馬頭長次、
音無右馬頭長宗、同息右馬頭長次、合無一鶴長盛、
同息孫次郎長光、同駿河守七郎、和田左馬ハ尉盛茂、
同弟盛次、有馬伊賀守、九山隆盛、到宮右馬ハ安清、到
宮蜂左衛門安正、本山三郎合鶴、板垣一鶴指監宮盛切
本八郎左馬ハ宮次、後ハ指一鶴、板本源八郎宮乗、禅久子
息島長守教守、同島長主右馬、平田長左馬ハ吉
長、竹内長門守良金、竹内新左馬尉 沖山伊豆守、山中庄

人正範直、同長部吉家、筑前浪四郎言延、同入道宥賀、
同新左衛門尉、二階堂和泉守俊実、同豊岡、同太郎正
安、同湯浅孫四郎、鳥居左衛門尉、波多野左近入道、岡
川武部、小池七郎、興主膳、梁俊、奇魔太四郎、狩右
馬之介正安、前山吾左衛門尉、陽堂
壹岐、宇井太郎金重、三善新左衛門尉、川合七郎良
氏、金良善性寺良村、三村地蔵覚、三井太郎左衛門尉
年、四橋入道貞長、百井善友、弥長淵七郎宗出、入海左
馬之助光、左近山博守義利、上津沢左近将監
家小船、新田一家定、其外年寄部之帰士新宮右衛門、
滝口、梅原、西東、塙内、永田、宮村、鈴木、宇井、横井、
刑部、上野、芝、素地、山本、長島、鳴川、水谷、田中、那

宮村、宮崎カ
素地、素地ヒ

智かい、田良、益時、清水等で初各後詰と支度で
そ〳〵た。
一杉長主水三百余く先陣で有るべし攻め来る迄先
て城内より大勢稲毛竹公事のごとく二ツ有りべつ〳〵折の鉄
炮を於〳〵ゆ牛叫幣原勢、内樋口平介、杉長と家人大
勢鉄炮を掌死たる歟也無きめたる体にて猪熊一ゆ処
の無勢方芸或者城備後守嫡男太郎長重、荆井武蔵
守正、鬼ケ城泰九郎良輔主従殺百人引卒して鉄し棒を
城之く来先と塙来る進ゼ是に三塁全人打殺を是を
て上方より取巻打取れと下知を又仏石接合勢の家佐義
く兵鉄炮撃合り萬蔵義入帰ゼ打殺を双方差と一気
いして取所れ、新口城新次出延宝屋敷の方江引

敵に城に立籠
敵を城内

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03996

退柚の手ニ軍勢集り候ヲ待受一軍せんと云事ハ小山
法定、周参見、佐藤、小河内、村上、江田等を走り大木大
石橋用意して今やくと待受の上方勢勝ハ事を思い出撃
ハ殺り来る時鉄砲を矢を射やて大木大石列塁ケ
小百余人打殺を血ハ流なとして流へ川の深のごとし後者
一迫も迫ませ一団ハ引退く家ハ相国の仆者、畠山ハ高
教代無望ハ四結住ー打捨平岳と云荒者四五所迫出
ハ敵き地部ー通せと刈りけれども間も無く迫退く是ハ
無望方安堵ーて山ハ切見を宣旨ニ本宮ニ帰りけ
ようーて家ハ能神三郎ハ口行方より羽書到来一昨夜
和佐の城ハ村者主ハ寄戻り羽生ハ軍ハ「玉置の」様
餘多被討ハ自害を浦川、福井、浦野木、吉明院山

如等 玉置と一郎ハ十津川ハ逃行詰（玉置在ハ
政義他宮陸奥山城ハ幽ハ住居者）
一説ハ口城教父ハ事上方勢より一湊の城江向と入ル
ハ家ハ義軍ニ寄意用之者ハ家ー部ハ敵ハ口
ハ味ハ敵ハ依て早速城ニ来ル文より敵ハ口表門ハ方ハ
教父者と云
一上方勢陣ハ後大坂ハ下知として何後無事領近
辺ハ領主相頼所有合相国、大機四地寄石橋被渡
相撰ハ家業三ケ二程自然領家日ハ高
一寄者ハ浦ハ知ハ日一日部人参井和佐城春木嘉兵
衛居住
一ケ岳部田辺村者城後守居住

原本奥書

右之一冊者国学ニ仕官和田橋左馬之丞
実彦ヲ以テ九月結学士河楠素行御良清宮之
家臣芝治郎左衛門ヲ以テ写之
明治十三年庚辰十二月廿一日写之　山本香園

明治十五年九月中井氏ノ原本ヲ以テ照シタルニ誤字一箇所ヲ訂ス

山地一揆之事

文政年中武州ニ騒動ヲ生シ人々ヲ苦ムコトヲ
ラカ為ニ富ヲ軽ンシ貧ヲ救ハサセヌ
ロ事ニ富ノ中ニ有ル者ハ取民父母ノ子ヲ養ヒ育ル如ク
刑罰ヲ省キ賦斂ヲ減ク飢寒ヲ救ヒ貧ヲ
ヒ悲シマセ給ヒケル程ノ国也ケレトモ
ハヒケル様ニテ渇ル者ハ無実ノ罪ヲ負テ
ノ為ノ如ク成ル也
富ノ山地一揆ノ騒動ヲ尋ルニ神保宗仕官和田喜
兵衛ト申者ハ拝姓賤キ者ノ人ノ文ヲ嫌ヒ者ヲ
ヒ申シ誤ノ懲ノ初ノ引テ民ヲ害ス又俗ニ云ル祈ル
ハ異端ニ及ル者ナレハ信ル様ヤ祈ル様通リ

一去ル頃ヨリ
ヒ申ノ
一ハ意見ヨリ

一おうらゑまそとり
一おあをそとり

御人いうとゑまそて、そ反たりける所に
ませいいと、無道なる事とも多りける方々古久保
太郎左衛門と申者の所を伺ひ家ありつる濁
酒ゐと呑反たりし。酒たけるおいあり所に
一おあたけおそかり
一おあをにふとそおけおと
一おあをとれをとり
一おそ、ゑまし

新き清酒の所を様多の肴とかいん殺者い悼りあり
ひき出せ在を見るおと方けるを和の青年様い立り年々に
和と口惜百姓原ゆおとしてこい様和を新言かおと
刀の柄の手を出しを世世様をつ承うけるを
一おあをけられとり
一おあをけられとり
一おあをけがとり
一おあをそとれおと
一おあをそとれとり
一おあをけんとり

接れの有ぎきをつけられ失れけり方は大方をとり会
所殺しける牛事掛後守同しめられ定て討手を向ら
ゝ是知死る人の仇敵の者の為の大方討れん事社恐
けれかゐはまそも掛後守一ヵ根々奉りてこそ湯とも

水とも知はけれかたくいかゐとありけれい方をおあり
子細のやおうをとゑしくと思ふ三十川様」大将として長
一おあをいかたくいかゐとあり
一おあ芝ゝとり

三年九月中旬南部の赤鹿様をあつまり会年の様をを
とたりける去比玉虫様方酒と申者赤い山地の侍をあり
一本様ナ方ゝとそ
一本反りけるかとり

が掛後守の者ゝ思者をつく歳り反たりけれ。紙を一様
の方ら者衣者知らせける種の牛事田辺をかくれおそけ
一本おうりけるがとり
一おあはあをまそませけれやとり
一おあ江反とり、

るを掛後守御在京をて方ゝ。せい河守反大沢十郎江
氏在ゝ佐々山ゝ内写柔十騎廿人養ゝ掛四九月中旬
笠十方京田兵大夫源氏重宗勢相大方右衛門佐重
相手勢南部ゝ上掛ゝ方、笠七也接れ保也、掛久也、
一おあ芝ゝ、
一おあ木重坂

笠三方方ゝ、玉置一孫也、秋津ゝ用良一党家後外兄
河関也、田中を克郎兵三方俗人大坂ゝ馳何来堂坂

一本廻坂ノ柵ノ様
鉄砲ニテ
一本ハ
一本ハ
一本ハ

一本目録ニ無ケレトモ
ナカ
一本ナカ

一本ハ
一本ハ

一本首ヲ
一本等ノ
一本ハ

一本等ノ
一本ナニヶ所
一本ハ
一本詩
一本

き蛾、深笠等へを進みけす一撥の葉い軽井川よりのぼり廻坂の柵を廻り鉄炮を揃へ待居たり高所の方よりも鉄炮をきまるく大郎日雄の若武者と呼叫び来けれども一撥のやうもい者ハ慶特をの及事とし谷筋こそ多けれ百ハ一つもつやを吉告ハて有矢実ハ多くけれい高手多くうたれ傷者して攻あくんと見へ一家ハ勝田、貴清、目良、詩物の猪ぎハ大ためけり太刀真向ハ十かさ百姓共ハ外として仕程の事の数へき手詰の勝負ハ拾ていハ呂猿ハ大刀ぎハたせたるハ田しかさへと林刀ハ切ハ、見ハ、先ハと切てハ、れいハ以もやいろめきて又くと琴ハの

いつぞ有
さや者の刀
奴原ハ
たれんを
せと云て
ありい無
ぎに
ぎつと
て手負
岩折谷
岩、一首
たこ
ハ

田辺人真砂原照享和元年筆ノ田
一巻延宝年間
在処ハ子ヨリ
慶長三甲午
蜂部田辺城
主居ノ良宅駿
本小川近並壁
昭和十五年三月三十日愚竜

西山村
ヨリ道法三十丁
日ノ新宮ノ山路帰一撥
形者ヲ放頭ノ在来宿
臣駿河彼地及合戦一撥ヲ張
並壁徒百余人ヲ討捕

りてさめ
日髪ヲ
ハ
ハ
ハ

一本扇板ニ柵ヲ樣
鉄砲ニテトル
一ホウホウノ方ヨリ
ニテ[illegible]
一ホウホウヨリ[illegible]
ニテトル

き跡、深蓋等へ進みけり一橋の輩い輕井川よりのおり扇板の柵を廻り鉄炮を揚く待伏たり彰義の方よりも鉄炮出きまるくれ早雄の義烈なる喚叫。黄けれども一橋のやうもりい常ふ慶特をの及事とし谷峯こそ。けたるものをも目わさく。たれい百ふ一つもつやる事ふ有矢更ふ矢こすけれい高手多く。うたれ傳当して攻あくんと見くし。京ふ勝因、愛須、目良、詩物の猫をいためけり太刀莫何ふ中かさし百姓弟の外として何程の事の為へき手誘の勝負ふ拾ていい呂猿ふ大刀をいたせたるふ因しかるくしと林四郎左衛門、濱戸善弟、根来ると。先ふと切てかくれい前の如く鉄炮つまへたるふ似もせをもやいるめきて又くふけるふれとも曹ふ善弟ふ

一本首をはねられ
ものとか
一本等ノ等ヲ又ル
一本ハ右の者ヲ図の者
ヨテ
一本年ヲ会年ヲ
一本十二ヶ所出手
ヲヲトス
一本京ノ田中三郎
新今三ノ又郎ヲ
先ヲトス
一本詩樹ヲ
中ニ先ハ田中三
郎カ
一本年先ヲトヲ

一本等等を

いつで有を一き命をとき塗の手械もちまりてさめさや巻の刀十文字ふ十ヶ所ふ立あかり〻中髮ふき奴京ル わつの命全のびとり者一ヶふかめ承られ首い放たれんをめを一ヶ汝等ふかためふい天時よき敵を切死ふせをを云をて大勢の中へわつて入さをの名を得一陣の者るれい無の義烈風情をきつさきより火煙を出て〻を前線の敵をと追つまりつ走を義初の次のけふをつと反き息をつぎ出美〻が深手〻を手十二ヶ所ふて手負人うい巻まをるりと勝ちらんとせ一番当手の岩新宮二郎三郎うつを又〻の後ふ△をとり鉾ふ巻き一番くせ一おけ一橋の大将紫市四郎中三を打取たりとたるかのの〻りけれい一橋の軍勢さきふ右往左

県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03996

一京都井川文次郎ハ井手を堰き堰を造り柿を植ヘシトテ

偖カ屋ち行橋井川ハ口碑所記を堰を造り柿を植ヘシ山地の
偖テ延宝口碑だ〻〻の如く切和せ首八十餘を取た
りけり其後ハ此句の比林後宇大蔵つゐて在る者
七十余人生柿百種余の八十一ヶ所首しと牛臭ハ黒首しと
を置れけり

一本在る坂文七十人生柿百

一本置れけりとも云ふ

右山地一樣ハ元ハ行人所記人ハ沙本宮初宮坂本山
匠安倍本宮之
桜市中大帳所記文魚賜勝而。其此記自然淡生左工
門佐知定賜勝田九郎兵ヲ佐勝感書有今度
日宮郡一樣之文而書慶長廿年閏六月廿四日慶長
二十年別元和元年也是三年相違七年仰非杉若
氏ノ時並別件事淡生キ時而非杉若氏ノ時年今

自ハ同ク

三年ノ上ニ財家カラ
ン巻ヲ

録以辨後書
慶應三年十月十四日　石田芳雄先生ニ教
明治十三年巻十二月下旬　サニノ部書写之
昭和三年十月下旬之　山本香園
国宮博次郎

無学記並山地一樣五ヶ和寺山岩之図書録葉ノ写
本ヶ昭和七年九月七日借リテ之ヲ写シ置ク
佐南古学研究
熊谷中根七郎

県立串本古座高校所蔵　中根文庫　資料番号　03996

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03996

県立串本古座高校所蔵　中根文庫 資料番号 03996